Ⅰ 学修の基本姿勢

1.「学習」から「学修」への自覚

「学ぶ」とは、語源をたどると、「まねてする・ならっておこなう」とあります。

入学生の皆さんは、すでに、教えをうけ業をさとされて「学習する」基本的な生活態度を身につけ、大学生活を迎えられたことと思います。

大学生活では、まず、「学習」から「学修」への自覚が要求されてきます。

この「学修」の意味するところは、学ぶことから転じて修めることに重きをおくものと考えます。

「修める」とは、『学問や技芸を身につける』（広辞苑）と明記されています。つまり、「大学は、学修する場である。」ということは、自ら進んで学問や技芸への精進の道を探求する場であると意味づけることになります。

この精進する道の探求にあって大切なことは、ひたむきな向上心にあると考えます。

皆さんが、大学生活において、自ら進んで学修にいそしみ、成就感や充実感を満喫されますよう切望いたします。

2．的確に情報処理できる能力の修得

情報化の時代といわれるように、現代に生きる私たちにとって、多種多様にわたる情報の渦中にあることは否めない事実です。

したがって、常に的確な情報処理の可能性を求めることが必然となってきます。

かつて、マスコミの普及した社会に生きるために、価値観の相違や矛盾が問われたことから考えると、現代における情報は量質ともに比較にならないものがうごめき、それらの情報への対処が余儀なくされているわけです。

つまり、情報化の時代に生きる私たちにとっては、情報化へ対処する在り方として、思考力や判断力を確かなものにするとか、価値観の多様化に左右されないようにするとか等々の問題で片付けることができないという様相を呈してきているのです。

それだけに、私たちは、多岐亡羊の情報を的確に取捨選択する知識、能力、態度を身につけ、生活にあって「最も大切なものはなにか」という、人としての生き方在り方にかかわる確かな価値観の修得が問われています。

3．真理や正義を愛し人権に根ざす研鑽

学問や技芸に励むうえで、最も大切なことは、ものごとについて「なにが真理であり、なにが正義であるか」という識見にあると考えます。

『真理や正義を愛し、個人の価値をたっとび、…』と教育基本法に謳われている教育の理念にたちかえって考えることが必要です。

『故きを温めて新しきを知る』とは、古代中国の先哲である孔子のことばです。この考え方は、古来から、学問や技芸を身につける在り方として継承されてきており、先人に学ぶことの意義は極めて大切なものということができます。

真理や正義を基本にする論理としてものごとを見極めていくうえで重要な研鑽の姿勢であると考えます。

現代はグローバルにものごとを考えることの必要な国際化の時代であるといわれているように、真理や正義を愛することは、人類にとって一人ひとりが最大限に尊重される人間の生き方在り方にかかわる研鑽の道であると考えることができます。個人の価値をたっとぶとは、人権尊重の理念そのものであるといって過言ではないと確信します。

4．生涯学習社会へのいとぐちの探求

「あなたはどこで教育をうけどこの学校を出ましたか」と問う社会通念が優先する時代から、「あなたはなにを学びなにができますか」と問われる社会意識に転じてきた時代といわれるようになりました。

大学生活にあって、学修の道への探求に勤しんでいる皆さんに問われているのは、個々の専門はなにであり、なにを身につけようとしているかということになります。

つまり、短大を卒業して四年制の大学へ編入し学問や技芸の研鑽の道を志望する人、短大で修得した資格や専門性を活かして就職し職業人としての道を歩もうとする人、さらに、家庭や地域社会にあって個々の特性や専門性を活かして貢献しようとする人等々、それぞれの求める道は、多岐多様にわたっているということができますが、そこに必要なことは、個々の特性や専門性がどのように活かされるかということに他ならないと思います。

ここで大切なことは、生涯学習社会に生きる「学ぶ意欲」をもち、「学び方」を身につけ、「学び続ける力」を持ち続ける自己教育力へのいとぐちを確かなものにすることにあると考えます。